

沁み方

2025. 1. 23

それは、日曜日の朝だった。ある方からラインが届いた。

おはようございます！まさにいま「人生は、燦燦と」読破しました！

仕事に行き詰まったときちょっとずつページを開いて、ちょっと涙がでて、よしやるぞと仕事に向かうの繰り返しでした。

先生の校長室だよりは頻繁にHPで拝見していたのですが、やはり活字で読むと沁み方がちがいました。特に、最後の卒業式と領収書の人生は涙腺崩壊でした。人を大切にすることの意味を考えさせられました。

今は、毎日がいっぱいいっぱい、先生に恩返しできず申し訳ないのですが、～

ありがたい文面なのだが、新年早々に1冊の本が届き、忙しい合間を縫って読んでくださったのかと思うと、申し訳ない気持ちが先にくる。毎日がいっぱいいっぱいとのことだが、実際そうなのだろう。毎日、必死であろう。以前「校長室だより～燦燦～」に「必死の二年」というタイトルの文章を載せたことがある。100選に入り、『人生は、燦燦と』にも入っている。今が、必死の二年の真っ最中なのではなかろうか。きっと、これからの人生のためには必要な時間なのである。いっぱいいっぱいになることを経験した人でなければ、いっぱいいっぱいになっている人に寄り添うことはできない。本人は、いっぱいいっぱい、うまくいかないことが多いと思っていなくても、実は、日々成長を続けているはずである。そのことは、後になってからわかる。

自分も一読者になって、一読者の気分になって、自分の本を読んでみた。「校長室だより～燦燦～」の原稿は、1000号分もある。HPにアップする段階で推敲するために3回ほどは読んでいる。本にする際にも、1000の原稿を100に絞り、2回ほどの校正作業を経る間に4回は読んでいる。どの原稿も最低でも7回以上は読んでいる。

ところが、改めて本の形になった原稿を読んでもみると、また違ったものを感じた。味わいが違うのである。パソコンの画面上で読む。A4判1枚の紙面上で読む。そして、本として読む。それぞれ違うのである。

いったい、何が違うというのだろうか。内容は同じはずである。今回、その答えを教えてもらった。“沁み方”が違うのである。なるほどである。本になると、もはや原稿ではない。自分の心に体に沁みくる感覚がある。やはり、パソコンよりは紙である。それも、書物という形状がよい。

ラインには、「ちなみに、こんな感じでよませていただいていたいました。」と画像も送られてきた。そこには、黄色とピンクの付箋だらけの本があった。ありがたい。沁みるなあ。